

QR Newsletter

第四紀通信

Vol.1 No.1, 1994



巡検報告参照

Vol. 1 No. 1

January 20, 1994

学会講演会のお知らせ	2	研究委員会から	6
巡検報告	3	「アジア学術会議」参加報告	7
IGBP-PAGESの最近の動き	4	学会記事	8
国際集会のご案内	5	会員消息	8

学会からのお知らせ

■日本第四紀学会講演会のお知らせ

日本第四紀学会講演会「モンスーンアジアの古水文変動の復元に向けて」を下記の予定で開催いたします。広く関心をお持ちの方をおさそいの上、ご参加下さるようお願いいたします。なお、終了後、懇親会を催します。

日時：1994年1月22日（土） 13時30分～17時

会場：東京都立大学理・工教室棟204号大講義室

（東京都八王子市南大沢1-1；京王相模原線「南大沢駅」より徒歩12分）

プログラム：

門村 浩（東京都立大学）：古水文変動の復元に向けて；趣旨説明

田村俊和（東北大学）ほか：モンスーンアジアの古水文環境復元への斜面堆積物の活用

小野有五（北海道大学）：氷河・周氷河地形からみたモンスーンアジアの古水文環境

須貝俊彦（東京大学）：段丘堆積物による古水文環境復元

小口 高（東京大学）：移動土砂量による古水文環境復元

■日本第四紀学会 1994年大会（総会・研究発表会） [第1報]

1. 日程

1994年 8月26日（金） 一般研究発表

8月27日（土） 一般研究発表・総会 [終了後：懇親会]

8月28日（日） シンポジウム

8月29日（月）・30日（火） 巡 検

2. 会場

東京都立大学（〒192-03 東京都八王子市南大沢1-1）

大会準備委員長：町田 洋（東京都立大学理学部地理学教室）

3. シンポジウム

テーマ：「高精度年代決定と第四紀編年」

オーガナイザー：町田 洋（東京都立大学）・大村明雄（金沢大学）

4. 巡 検

テーマ：「伊豆半島北端部プレート衝突域の第四紀」

案内者：山崎晴雄（東京都立大学）・水野清秀（地質調査所）

■編集委員会からのお願い

1994年刊行される「第四紀研究」第33巻以降の編集は、1993-94年度編集委員会（編集幹事：熊井久雄・岡田篤正）になり、編集主体が関西地区に移りますが、「第四紀研究」に投稿される原著論文・短報・書評・資料等の原稿は、従来どおり学会センター宛にお送り下さい。

送り先：〒113 東京都文京区本駒込5-16-9, 学会センター C-21,
日本第四紀学会編集委員会

上本進二（神奈川県立旭高等学校）

1993年度日本第四紀学会の巡検は「北部九州沿岸の弥生時代文化と自然環境」をテーマに、8月30、31日の2日にわたって実施された。案内者は杉山富雄会員（福岡市教育委員会）、下山正一会員（九州大学理学部）で、参加者の専門分野は、考古、古生物、地形、地質と多岐にわたるが、遺跡の立地環境を共通のテーマとしている。

30日は8時に福岡駅をマイクロバスで出発。最初の見学地の板付遺跡は、日本最古期の稲作が行われたことで知られており、3つの台地面に弥生時代前期の環濠集落跡と水田跡が検出されている。遺跡の一面にある板付遺跡弥生館には遺跡の復元模型をはじめとして出土遺物や弥生人の足跡などが展示されている。続いて、板付遺跡の北に隣接する比恵遺跡第50次調査の発掘現場を、福岡市埋蔵文化財課の野村さんの案内で見学した。遺跡内のトレンチで約8万年前に阿蘇カルデラから噴出したAso-4火砕流の堆積物とその上位の風積土層を観察した。次に福岡市西部の早良平野を流れる金屑川東岸にある免遺跡（第4次調査）を見学した。ここでは福岡市の中村さんの案内で、弥生時代中期から古墳時代後期の自然流路跡および護岸と堰を兼ねた大規模なアーチ状井堰跡を見学した。また、パワーショベルでトレンチを掘って遺跡の土層を観察した。この後、遺跡南端で土層を観察していた参加者が、黒泥層上部で厚さ20cmの火山ガラスの純灰層を発見した。この火山ガラスは後日竹村恵二会員によってアカホヤであることが確認された。福岡市ではアカホヤの純灰層が見つかることは非常に珍しく、今回の発見によってアカホヤの層位が確定し、今後の縄文時代研究に新たな進展が期待されることになった。これぞ第四紀研究の醍醐味といえる場面であった。

「魏志倭人伝」の奴国にあたる福岡をあとに、伊都国にあたる糸島平野南部へ。その一面に前原市伊都歴史資料館があり、中庭の涼しい木陰で昼食をとる。資料館は休館日であったが、前原市教委の川村さんの案内で特別に見学させていただいた。糸島平野の地形模型の前では「糸島水道」についての解説があった。『魏志倭人伝』の伊都国から耶馬台国へのルートの謎を解き明かす鍵になると思われた「糸島水道」も、存在しなかった可能性が高いことがわかってきた。資料館の考古資料は平原遺跡の39面の銅鏡など伊都国の高い文化を示している。資料館をあとにして、車窓から幻の「糸島水道」と南朝鮮式支石墓（ドルメン）の位置を確認して、一路唐津へ。

唐津平野のほぼ中央にある鏡山（283m）は絶好の展望台で、白砂青松の虹の松原や玄海灘に向かって高度を下げる松浦半島のメサ地形が望まれる。ここから唐津平

野の地形分類と縄文晩期水田跡が検出された菜畑遺跡の説明をうけた。続いて、松浦半島随一の景勝地七ッ釜に向かう。玄武岩が玄海灘の波浪に侵食され、多くの海食洞が形成されており、柱状節理とともに奇景を見せている。その海食崖の上で風積土層を観察した。“おんじゃく”と呼ばれる玄武岩の風化土（紫～赤紫色）を見ながら、今夜の宿泊地唐津に戻る。宿舎の坂本屋旅館で山海の珍味とビールで懇親会。

旅館は唐津湾と松浦川に挟まれた砂州の上であり、虹の松原も近い。早起きの会員には絶好の散策の場となった。31日は8時過ぎに唐津発。背振山地を越えて佐賀平野へ。九州地方建設局の古賀さんと佐賀市教委の前田さんの案内で、多目的導水路「佐賀導水」の建設工事現場内にある東名遺跡を見学した。遺跡からは縄文時代早期末の塞ノ神式土器が出土している。ここでもパワーショベルの威力で厚さ5mの粘土層を観察した。

黄砂で空は霞み、フェーン現象で気温はぐんぐん上昇する中、今や日本で最も有名な遺跡となった吉野ヶ里遺跡に向かう。佐賀市教委の七田さんの案内で現在発掘調査中の地区を見学後、名物「吉野ヶ里お弁当」の昼食。遺跡は背振山地から張り出した比高7～8mの中位段丘下位面（阿蘇-4火砕流堆積物）に三重の環濠をめぐらせた大規模なもの。吉野ヶ里以西にこれより高い中位段丘はないとのこと。三層の楼閣から邪馬台国は見えただろうか。

最後の見学地は、Aso-4火砕流によって倒され焼かれたトウヒ属の巨木群（直径1.5m）があらわれた佐賀県上峰町の八藤遺跡であった。上峰町の鶴田さんと佐賀県教委の小松さんの案内で、炭化木から出た「煙の化石」や火砕流下部の緑色をしたグランドレーヤーなどを観察した。下山会員によれば、巨木の倒れた方向からAso-4火砕流の流向が推定できるという。長崎自動車道と九州自動車道のおかげであっという間に福岡空港着、ほとんどの参加者はここで降り、JR博多駅で解散した。

この巡検をとおして、日本列島の弥生文化発祥地の豊富な遺物、桁違いの規模を持つ遺構に目をみはるとともに、遺跡調査に深く関わっている自然科学研究者の姿が浮き彫りにされてきた。考古学と自然科学の共同研究のあり方が今回の巡検で示されたと思う。

晴天に恵まれ、案内者の杉山会員と下山会員の綿密な計画と立派な巡検案内書のおかげで、わかりやすく有意義に進められた。また、各見学地では発掘担当者の方々に懇切丁寧な説明をさせていただいた。これらの方々に深く感謝いたします。

IGBP-PAGESの最近の動き

遠藤邦彦（日本大）

IGBP(INTERNATIONAL GEOSPHERE-BIOSPHERE PROGRAMME)の中で古環境の変遷を扱う
PAGES(PAST GLOBAL CHANGES)の動向、およびIGBP全体の最近の動きを紹介する。

■「日本のPAGES—IGBP, 古環境の変遷—」 研究者集会の報告

主催：IGBP専門委員会, 第四紀研連, 地理研連
共催：地質科学総合研連, 地質学研連, 古生物学研連,
気象学研連

標記研究者集会が1993年6月21日に日本学術会議において開催され、約45名のが参加した。

吉野正敏IGBP専門委員会委員長による開会の辞の後、午前中には藤原健蔵座長の下で「日本におけるPAGES関連研究」の4つの研究発表が行われた。

1. 遠藤邦彦（日本大）：タクラマカン砂漠の古環境
2. 漆原和子（駒沢大）：インドネシア、ジャワ島の古環境
3. 吉村 稔（山梨大）：歴史天候データベースを利用した江戸期後半の乾湿の復原
4. 小野有五（北海道大）：最終氷期の東アジアの古環境復原
午後には遠藤邦彦・松本英二座長の下でPAGES関係研究グループの経過報告や研究の紹介が行われた。

1. 文部省関係：
松本英二（名古屋大）：IGBP-MESCの進捗状況
大場忠道（北海道大）：深海堆積物の分析
2. 文部省国際学術研究関係：牧田 肇（弘前大）
雲南省の古環境復元調査（代理：藤原健蔵）
3. 地質調査所関係：井内美郎（地質調査所）
地質調査所関係の PAGES研究
4. 砂漠・砂漠化関係：遠藤邦彦（日本大）
科学技術庁「砂漠化機構の解明に関する研究」
5. 熱帯地域：門村 浩（東京都立大）
熱帯地域の古環境に関する研究の現状と課題
6. 環境庁関係：小池裕子（埼玉大）
環境庁のIGBP関連研究から「熱帯林の減少」、
「野生生物種の減少」等の紹介

7. LOICZ計画：米倉伸之（東京大）

LOICZ (Land Ocean Interactions in the Coastal Zone)
計画について

討論は小野有五座長の下で、日本においてPAGES研究をいかに進めるべきか、活発な議論が行われた。文部省のIGBP予算だけでは限界があり、文部省の国際学術研究や他省庁予算の関連研究と連携してPAGES研究を進めること、また情報のパイプを太くするためPAGES小委員会を作り、担当学会へ情報を流していくことが決まった。

PAGES小委員会（連絡会）（ ）内は担当学会

文部省関係（PAGES-MESC）：小野有五（地形学連合）・
大場忠道（古生物学会）・松本英二（地球化学会）・
吉村 稔（気象学会）

国際学術研究関係：藤原健蔵（地理学会）

各省庁関連研究関係：井内美郎・遠藤邦彦（第四紀学会）・
徳岡隆夫（地質学会）

最後に太田陽子第四紀研連委員長による閉会の辞でこの集会は締めくくられた。PAGES研究に関するご意見やご質問をぜひ上記メンバーにお寄せいただきたい。

■「日本のIGBP研究の現状と将来」 （第3回）シンポジウムの開催について

主催：日本学術会議

日時：平成6年2月8日（火）13:00～17:10

2月9日（水）9:40～12:20

会場：日本学術会議講堂

PAGES関連のプログラムは2月8日（火）13:50～14:30に、また領域別会議が2月9日（水）13:30～から開かれます。参加ご希望の方は、平成6年1月21日（金）までに、氏名・所属・職名・参加日・参加希望領域を、〒106 東京都港区六本木7-22-34 日本学術会議事務局 学術課 総括係までお申込みください。

<INQUA, XIV INTERNATIONAL CONGRESS の お知らせ>

INQUA第14回大会の第1回回状が配布されました。参加申込書をご希望の方は下記にお問い合わせ下さい。

期日と場所：August 3-10, 1995, Berlin, Germany

連絡先：XIV INQUA CONGRESS, Congress Partner GmbH, Emmastr. 220, 28 213 Bremen

Tel 0421/219073, FAX 49-421/216419

<1994年開催の国際集会>

■International Inter-INQUA Field Conference and Workshop on Tephrochronology, Loess, & Paleopedology

期日と場所：February 7~12, 1994, Hamilton, New Zealand

連絡先：Dr. D. J. Lowe, University of Waikato, Private Bag 3105, Hamilton, New Zealand,

Tel 64-7-856-2889, Fax 64-7-856-0115

■Toxic Substances and the Hydrologic Sciences

期日と場所：10-13 April, 1994, Austin, Texas, USA

連絡先：American Institute of Hydrology, 3416 University Avenue, SE, Minneapolis, MN, 55414-3328, U S A.

Tel 612-379-1030, FAX 612-379-0169

■Glacial Cycles at High Latitudes their Effects on the Physical Environment

期日と場所：29. May-1. June, 1994, Fjaerland, Norway

連絡先：Dr. Anders Elverhoi, Project Administrator, Department of Geology, P.O. Box 1047 Blindern, 0316 Oslo, Norway

Tel 47-22-856656, FAX 47-22-854215

■Environmental Geotechnics

期日と場所：10-15, July, 1994, Edmonton, Alberta, Canada

連絡先：D. C. Segoo, First International Congress on Environmental Geotechnics, Department of Civil Engineering,

University of Alberta, Edmonton, Alberta, T6G 2G7, Canada. Tel 403-492-7228, FAX 403-492-8198

■Sedimentological Congress

期日と場所：20-26, August, 1994, Recife, Brazil

連絡先：Margareth M. Alheiros, 14th ISC, Caixa Postal 7801, Cidade Universitaria, 50739-970 Recife, Brazil.

■GLOCOPH '94 - International Meeting on Global Continental Palaeohydrology

期日と場所：10-17, September, 1994, Southampton, U. K.

連絡先：Dr. Julia Branson, GeoData Institute, University of Southampton, Southampton SO9 5NH, U. K.

Tel +44-703-584-565, FAX +44-703-592-849

国内連絡先：東京都立大学理学部地理学教室 門村 浩、Tel 0426-77-2605, FAX 0426-77-2589

■International Volcanological Congress

期日と場所：12-16, September, 1994, Ankara, Turkey

連絡先：Dr. Ayla Tankut, Organizing Secretary, Department of Geological Engineering, Middle East Technical

University, 06531 Ankara, Turkey, Tel 90-4-210-1000, ext. 2682 or 2679, FAX 90-4-210-1263

■European Palaeobotanical-Palynological Congress

期日と場所：19-24, September, 1994, Heerlen, The Netherlands

連絡先：Dr. G. F. W. Herengreen, General Secretary, c/o Geological Survey P.O. Box 157, 2000 AD, Heerlen,

The Netherlands

(文責：渉外幹事)

研究委員会から

1992/93年活動報告

■ INQUA/GLOCOPH 対応研究委員会

代表世話人 門村 浩 (東京都立大)

本研究委員会はINQUA/GLOCOPH (グロコフ, 地球大陸古水文コミッション) 湿润熱帯分科会対応の熱帯地域環境変遷・古水文研究委員会として発足したが, 対象を世界の全気候地域に拡張してGLOCOPH全プロジェクトに対して実質的な貢献をなすため, INQUA/GLOCOPH研究委員会と改称した. 1992年度はサーキュラーを2回発行 (配布数60部). 研究集会を1回 (1993年7月17日) 開催し, 代表者 (門村 浩, 東京都立大), 幹事 (小口 高, 東京大), 書記 (宮本真二, 東京都立大) を決め, 門村, 宮田の研究報告をめぐる討論と, 今後の活動方針の検討を行なった. 今後の活動については, 関連研究のアクティビティを高めるため, 早い機会に「モンスーンアジアの古水文変動」を主題としたシンポジウムを開催するのが望ましい, という基本方針を決めた. この線に沿い, 「モンスーンアジアの古水文変動の復原へ向けて (仮題)」と題するミニシンポジウムを1994年1月22日午後, 東京都立大学 (八王子市) で開催することになった.

■ 上・中・下部更新統境界に関する研究委員会

代表世話人 熊井 久雄 (大阪市立大)

本研究委員会は北京 INQUA大会で提案された中/下部更新統の模式地候補地である千葉県養老川セクションについて国内での討論を主とし, 合わせて上/中部更新統模式地についても考えていこうと組織された研究委員会である. 当面の具体的課題としては, 昨年夏の千葉でのINQUA更新統の区分に関する小委員会現地検討会を受けて, その折に宿題として提案された諸課題について国内研究者で研究分担して, 総合していこうというものである.

第四紀学会の研究委員会に採択されて以降は, 主として研究組織の拡大と各種分析の分担について連絡をとってきた. 本年度は分析結果などまだ完了しないものがあるので, 委員会活動としては委員に対する連絡や科研費申請の計画策定のみに終始したが, 来年度の今秋以降に各種分析結果などに関する検討会をもちたいと考えている.

■ テフラ研究委員会

委員長 町田 洋 (東京都立大学)

A. INQUA COT (Commission on Tephrochronology) 集会

日時: 1992年9月8日-10日

場所: 富山平野および立山

テーマ: テフロクロノロジーと日本アルプスの第四紀

形式: 主として野外での観察と討論, 夜間集会

組織委員: 町田 洋, 藤井昭二, 奥村晃史

参加者: 国内外あわせて28名

案内書: Guidebook for the COT Excursion - Quaternary Tephrochronology of Mt Tateyama and Adjacent Areas

B. テフラ研究委員会/野外巡検と集会

日時: 1993年3月29日-31日

場所: 鹿児島/宮崎 (鹿児島一大隅半島-霧島東麓-人吉盆地-宮崎平野-鹿児島)

テーマ: 1. 巨大火砕流から降下火山灰の生産過程

2. 考古学遺跡にみられるテフラ噴火の影響

3. 南九州のテフラ/地形/第四紀編年

4. その他

形式: 主として野外での観察と討論, 夜間集会

組織委員: 町田 洋, 森脇 広, 長岡信治

参加者: 44名

案内書: テフラ研究委員会野外集会9303-南九州のテフロクロノロジー

C. IGBP-PAGES/INQUA-COT sponsored international meeting on "Climatic impact of explosive volcanism"

日時: 1993年12月1-4日

場所: 明治大学 (討論会), および浅間/榛名火山山麓 (野外巡検)

テーマおよび目的: "爆発的火山噴火がグローバルな気候にどのように影響するか" 現在までの知識の総括と今後の展望, 特に各国諸研究機関への提言の作成

組織委員: 町田 洋, 遠藤邦彦, 三上岳彦, 奥村晃史, 杉原重男, Jim Beget

野外巡検案内者: 早川由紀夫, 早田 勉, 新井房夫

参加者: 35-40名 (討論会), 27名 (野外巡検)

案内書: Abstracts IGBP-PAGES/INQUA-COT Meeting "Climatic impact of explosive volcanism" (1st Meeting), Excursion Guide to Asama and Haruna "Asama and Haruna Volcanoes: Recent Eruption and Hazards"

D. 今後の活動予定

1994年2月7日-18日, New Zealand Hamiltonにおいて, Inter-INQUA Congress meetingを開催 (COT, Paleoedology, Loess の3 Commission の合同集会).

1994年6月北海道においてテフラ研究委員会野外集会を開催する予定.

■海岸線研究委員会

代表世話人 大田陽子（横浜国立大）

- 1) INQUAの海岸線委員会西太平洋部会のニュースレターを発行した。
- 2) 参加希望者の申告（6月20日締切り）により（約15名の参加）、参加者名簿を作成した。
- 3) 9月以降にUSAのBloom教授を招いた講演会を行なう予定。その際今後の活動について討論会を開く。

■応用第四紀研究委員会

代表世話人 大田陽子（横浜国立大）

- 1) 参加希望者を公募し（6月20日締切り）、10名から希望が寄せられた。関心テーマを含む参加者リストを作成中。
- 2) 7月9日のシンポジウム「古地震をさぐる」開催にあたって準備に協力した。
- 3) 参加者へのアンケート調査を行ない、今後の活動方向を決める予定。

会議報告

「アジア学術会議」参加報告

第四紀学会会長 相馬 寛吉

「日本学術会議だより」No.30で予告されたように1993年11月15日から18日「アジア学術会議」が開催された（第四紀研究、32-5, p373参照）。アジアの9ヶ国から各分野の代表19人が参集し、「アジア地域における学術の発展とそのための連携・協力について」議論が行なわれた。詳細については日本学術会議から追って報告があると思うが、その成果・提案等の概略を紹介する。

1) 学術・研究の成果は人類の福祉に通じ、世界平和に貢献するものであるから、自然科学者と人文・社会学者の協力が必要である。

2) アジアの科学者の学術協力には日本学術会議の今後の一層の努力を期待する。

3) 環境・人口・資源問題の解決には本会議が国際協力の原動力となるよう努力したい。

4) 次世紀への継続的発展が各国の重要課題なので、アジア各国の科学者の協力が重要となる。

5) 一地域発展のために協力が効果的なら、研究・技術・資源の共有を推進する必要がある。

6) 次世紀へ向け、人材育成のためアジアの科学者は協力が必要である。

7) 研究者の交流・共同研究・シンポジウム・ワークショップ等による情報交換が必要である。

8) 学術協力は対等互恵が原則である。

9) 議事を継続的に審議するため本会合が将来開催されることを期待する。

10) 日本学術会議が次の会合まで事務局を務め、定期的にニュースレターを発行する。

■「第四紀通信」掲載記事の募集について

日本第四紀学会の会報「第四紀通信 QR Newsletter」では、シンポジウム・国際研究集会の案内やその報告、教官公募・研究助成・研究プロジェクト紹介・博物館紹介・新刊紹介など第四紀関連情報を常時募集しています。原稿をお送りいただいても結構ですが、できるだけフロッピー（MS-DOSかMacintosh版）、あるいは電子メールで、下記の会報担当幹事までお送りください。

〒338 浦和市下大久保255 埼玉大学教養部 小池 裕子

TEL & FAX 048-858-3726

電子メール：hkoike@msys.cent.saimata-u.ac.jp

Nifty-serve ID: HGB03015

—— 会議報告 ——

■第1回幹事会議事録

日時：1993年9月18日

場所：東京大学理学部地理学教室

出席者：相馬寛吉（会長）、鎮西清高（副会長）、上杉 陽、熊井久雄、小池裕子、斉藤亨治、坂上寛一、杉山雄一、池田 安隆（以上幹事）、村上聡（学会センター）

1. 1993年度大会・シンポジウムは東京都立大学で開催することが決定した（大会準備委員長：町田洋）。シンポジウムテーマについては現在主催者側と行事幹事の間で折衝中である。

2. 学術会議第16期会員候補者（1名）との推薦人（2名）は、評議員による投票で決めることとなった。

3. 会費値上げに伴い、「第四紀研究」の海外購読料を現行の\$72から\$83に値上げする。

4. 学会賞を設けるか否かについて、企画委員会で検討を初めることになった。

5. 新編集委員会が発足した。編集委員は以下の通りである：熊井久雄、岡田篤正、海津正倫、河村善也、斉藤万之助、相馬秀広、辻誠一郎、那須孝悌、兵頭正幸、松浦秀治、松下まり子、吉川周作。

■第2回幹事会議事録

日時：1993年11月15日

場所：学会事務センター

出席者：相馬寛吉（会長）、上杉 陽、熊井久雄、小池裕子、斉藤亨治、坂上寛一、杉山雄一、池田安隆（以上幹事）、村上聡（学会センター）

1. 日本第四紀学会・小野 昭・春成秀爾・小田静夫（編）「図解・日本の人類遺跡」（東京大学出版会発行）が、1993年5月12日第2回雄山閣考古学賞を受賞した。

2. 学会事務センターより会員業務受託費値上げ（1994年度から適用）の要請があり、これを了承した。値上げの要因は主として会誌等の発送業務に関わる人件費の高騰にあり、この結果会員業務費の総額は約4.6%増加する。

3. 「第四紀通信（QR News Letter）」が1994年1月に発刊されることとなった。今後論文以外の学会関係記事は「第四紀通信」に掲載される。

4. 近年「第四紀研究」の特集号の編集が遅延する事態がしばしば起こり、会誌の円滑な発行に支障を来していた。そこで、次年度の特集号からは、特集号編集委員会を設けず、通常号と同様に編集委員会が直接編集を行うことになった。

5. 第四紀学会の学会賞の創設に関し、選考委員会の構成・関連する会則の改正案等について、企画委員会で

検討することになった。

6. 本会創立40周年事業の一環として、若手研究者養成を目的とする普及勉強会／現地講習会の企画を進めることになった。

7. 学術会議第16期会員候補者（1名）と推薦人（2名）を選出するために評議員による投票を行った。開票の結果は以下の通り。会員候補者：米倉伸之；推薦人：遠藤邦彦、菊地隆男。